

■花から実へ

本校では平成19年度から「表現力・コミュニケーション力を高める指導方法の工夫」を研究主題に掲げ、学年または個人ごとに研究の視点と手だてを設定して研究に取り組んできた。今年度は3年次研究の最終年であることから「変容の明確化」を目標とし、全校授業や一人一研究授業を通して多様な実践を出し合い、教科・領域の特性や学年の実態に応じた指導方法の工夫を探ってきた。

まず、4月3日に第1回研究推進委員会を開き、研究の方向性や見通しについて話し合った。具体的には、学年または個人ごとに教科・領域を選択して研究を進めること、児童の変容を明確化するために意識調査や評価方法等を工夫すること、全校授業は外国語活動を含めて行うこと、校内研修会の年間予定などを確認した。そして、4～5月中に学年または個人ごとに具体的な研究計画を立て、「校内研究提出用シート No.1」にまとめて提出した。

次に、6月15日の第1回研究全体会では、ジグソー学習の形態を取り入れたワークショップで、校内研究の課題について話し合った。その手順は、以下の通りである。

- | | |
|--|-------|
| ①課題づくり（全体） | 5 分 |
| ・まず学年ごとに取り組みたい課題を決め、次に全体で課題の調整を行う。3つ以上の学年が揃えば、課題成立とする。 | |
| ②課題の分担（学年） | 5 分 |
| ・学年内で課題の分担を行う。 | |
| ③課題についての話し合い（異学年課題別グループ） | 4 5 分 |
| ・話し合いの記録はパソコンで作成し、指定されたサーバーの共有フォルダに保存する。また、課題別グループのメンバー分を印刷して配る。形式は自由。 | |
| ④話し合いの報告（学年） | 1 5 分 |
| ・学年に戻り、口頭で報告し合う。（1人3分程度） | |

実際には、以下の5つの課題が出され、分担して話し合った。

- | |
|----------------------------------|
| A) 児童の変容を把握するための評価を具体的にどうするか？ |
| B) 自分づくり教育における「かかわる力」をどのように高めるか？ |
| C) 話し方パターン等スキルの系統化 |
| D) 学級の雰囲気づくり |
| E) 集団の中での個に応じた指導 |

このジグソー型ワークショップを行ったことにより、全職員で校内研究についての課題意識を深め、話し合いの結果を共有化することができた。

そして、6月から12月にかけては、教員全員が一人一研究授業を実践した。今年度

は1学期中に約半数の研究授業が行われるなど、計画的な取組が見られた。また、学年の実態に応じて様々な手だてが工夫され、これまでの研究成果を生かした実践の深まりが見られた。（「Ⅱ研究実践」参照）

さらに、外国語活動の全校授業を2回実施した。5年2組の「自己紹介をしよう」の学習では、フラッシュカードを用いたゲームを段階的に繰り返していくことを通して、児童が無理なく「Do you like ○○?」の表現を身に付けていく様子が見られた。また、6年3組の「My Storyーオリジナルの劇をつくろうー」の学習では、グループごとに既習の英語表現を活用した劇を発表した。楽しく和気あいあいとした学級の雰囲気の中で、どの児童も友達と協働しながら生き生きと豊かな表情で英語のスキットを表現する姿が見られ、表現力・コミュニケーション力が着実に高まっていることを実感することができた。（「Ⅲ全校授業」P.1～18参照）

なお、児童の意識調査については、全校児童を対象に4月と1月に実施した。昨年度までと比較しながら、表現力・コミュニケーション力に関する児童の意識の変容について探ることができた。（「Ⅴ資料編」P.1～10参照）

2月9日の研究全体会では、8班編制でグループ討議を行い、学年または個人の成果と課題を発表し合った。質問や意見交換なども活発になされ、異学年の教員同士のコミュニケーションを深めるよい機会ともなった。さらに、全体場で各グループの代表が発表することで、今年度研究の成果と課題を共有・確認することができた。

■表現力・コミュニケーション力の文化的背景を探る

本校の過去3年間の児童意識調査の結果から、「自分の気持ちを相手にわかりやすく話せる」「みんなの前で自分の考えを発表できる」の項目が「相手の気持ちを考えて行動できる」「自分と違う意見を認めることができる」の項目と比べて常に自己評価の低い傾向が見られた。このことは、協調性は高いが自己評価が低く自己表現を得意としない日本の文化的特性と関連しているのではないだろうか、との疑問を抱いた。

そこで、10月27日に宮城学院女子大学の高田利武教授をお招きし、「相互独立的ー相互協調的自己観について」というテーマで校内研修会を開催した。高田先生には、日欧の文化による自己観の違いや、他者との比較と自己認識との関わりなどについて、具体的に指導していただいた。特に、相互独立性と相互協調性の文化差や発達差、相互協調性と自己評価との関連については、本校の研究テーマでもある「コミュニケーション」のあり方を考える上でとても参考になった。（「Ⅴ資料編」P.11～18参照）

高田先生によれば、西欧の発達課題（自分をしっかり認識して、はっきり表現できる）に対して、日本では他者との協調性（みんな仲よく、和を乱さない）が重視される。すなわち、日本の文化的背景として、出る杭は打たれるので自己主張しすぎてはいけない（余計なことはいわずに黙っていた方が安全）という意識が働いている。言い換えれば、謙遜的（自己批判的）態度を示すことで自尊心を高めているということにもなる。その一方で、英語には、

「The squeaking wheel gets the grease.」（きしむ車ほど油がもらえる）ということわざがある。様々な民族が入り混じって共存している西欧では、常識も価値観も様々なので、自分がどういう人間なのか、今何を考えているのか、常に口に出して言うことが求められる。主張しないと絶対利益にはならない、出る杭でなくてはならないのである。しかし、日本では、「ごね得」「言った者勝ち」といった負の受け止め方をされかねない。

新学習指導要領では言語力育成が重要視されており、文部科学省言語力育成協力者会議の「言語力の育成方策について（報告書案）」には、以下の記述がある。

ディスカッション、ディベートなどを通じて、意見の異なる人と議論して協同的に問題解決をする態度を育成することや、意見の対立が生じたとき、その対立を乗り越えて問題解決をする仕方を身に付けさせることが期待される。我が国の言語文化の優れた点を継承しつつも、対話や議論に関する新たな文化を創造することを目指す必要がある。その際、多様な発想を互いに披瀝（ひれき）し、その発想を吟味検討することを通して新しい認識、総合的な認識が出来上がっていくことを実感させたい。

グローバル化社会に対応した教育が求められる今日、教師が児童にどのようなコミュニケーション力を育てていくか（教師の価値観）が問われている。その際、「コミュニケーション力」を文化的自己観尺度の視点から見直してみることを提案したい。すなわち、説明・説得や反論、ディベートなどの「相互独立的コミュニケーション力」と、言外からの察し、謙虚さ、相槌、共感、協働などの「相互協調的コミュニケーション力」とに分類し、文化的背景を踏まえた上で双方のコミュニケーション力をバランスよく育てていくことが大切になってくるのではないだろうか。

なお、本研修会後の11月上旬に、本校5・6年児童を対象にした「学校生活調査」を実施し、高田先生に分析していただいた。その中で、「本校の児童は相対的に相互独立性が高い傾向があると言える。一人一人の個人は異なった存在であることを認めることが相互独立性の前提である。本校で取り組んでいる『コミュニケーション力』はまさしく相互に異なった個人が互いの意志を交換する力であることを考えれば、相互独立性に関する本校児童の特徴は、取り組みの成果であると考えられることも出来よう。」との言葉をいただき、大きな励みとなった。高田先生には、深く感謝申し上げたい。（「V資料編」P.19～32参照）

■研究の成果と課題 ―変容の明確化―

今年度は、「変容の明確化」を目指して研究に取り組んだ結果、各学年から以下のような成果が報告された。

- 育てたい力を明確にして具体的な活動に継続的に取り組ませたことで、聞く力や話す力、質問する力が高まるなど、児童の変容が見られた。
- ペアやグループで話し合う経験を積み重ねたことで、話し合う力が着実に向上した。
- ワークシートの内容が詳しいと発表は立派だが言葉のやりとりが弱くなるため、ワークシートをシンプルにした結果、話し合いが活発なものへと変容した。
- 児童の主体的な活動を促し、「もっと表現したい」という必要性を感じさせることで、探究的に表現の幅を広げている姿が見られた。
- 単元の事前と事後にアンケート調査を実施することで、児童の意識の変容を明確にすることができた。
- 毎時間のワークシートを振り返らせることで、児童自身が自分の変容を実感できた。
- 児童の自己評価で、教師の手だての有効性が確認できた。

ここでは、特に6年生の意識と学力の変容について取り上げ、考察を加えてみる。

昨年度と今年度の1月に実施した児童意識調査の「異なる意見の尊重」と「発表すること」の設問について、同集団比較をした2つのグラフ（図1と図2）には、相関関係が見られる。つまり、「自分と違う意見を認めることができる」児童が増えることで、「みんなの前で自分の考えを発表できる」児童が増えていると推察できる。11月に実施した学校生活調査に関する高田先生の分析においても、6年生は「自尊心」が高く「他者軽視傾向」や「排他性」が低いという結果が出た。こうしたことから、コミュニケーション力を向上させることで学級内の人間関係や学びの雰囲気がよくなり、児童が安心して自分の考えを発表できる言語環境が整った結果、児童一人一人の表現力向上につながったと言えるのではないだろうか。本紀要の「Ⅲ 全校授業 P.17～18」に掲載されている児童の感想が、そのことを如実に物語っている。

また、4月実施の全国学力・学習状況調査の国語B（主として「活用」に関する問題）について、過去3年間で年度間比較したグラフ（図3）を見ると、標準化得点が年々向上していることがわかる。つまり、校内研究で「表現力・コミュニケーション力」の向上に3年間継続して取り組んできたことで言語活動の充実が図られ、児童の活用力の向上につながったものと考えられる。

さらに、他学年にも目を向けると、仙台市標準学力検査において、国語の「話すこと・聞くこと」領域の校内平均正答率が、実施した全学年で仙台市の平均正答率を上回った。これも、校内研究の成果と言えよう。

なお、校内研究の課題として、評価や変容の見とり方が不十分だったことが挙げられる。教科・単元に応じた評価シートの工夫や座席表の活用による評価の蓄積、振り返りカードによる自己評価の工夫等について、次年度も継続して取り組んでいきたい。

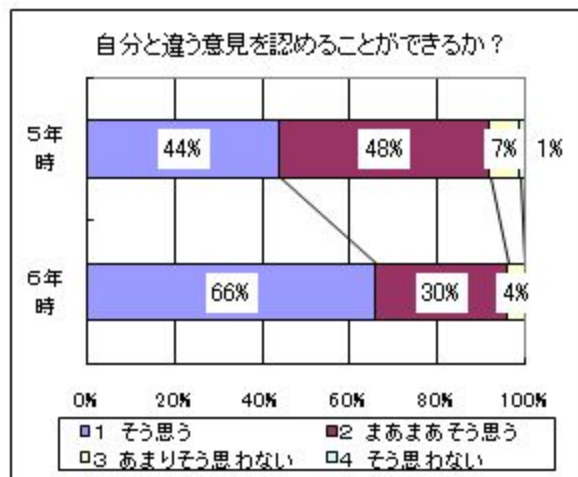


図1

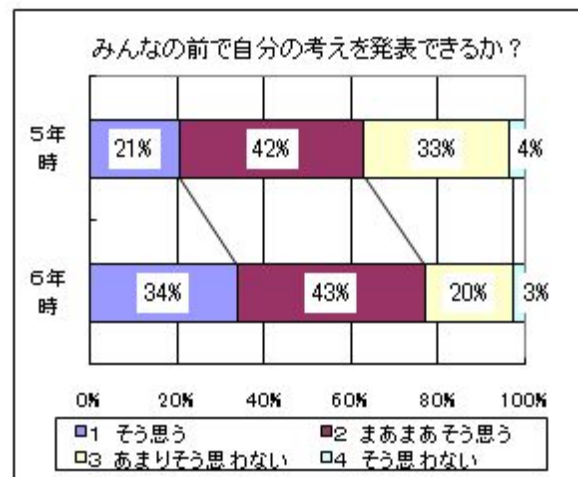


図2

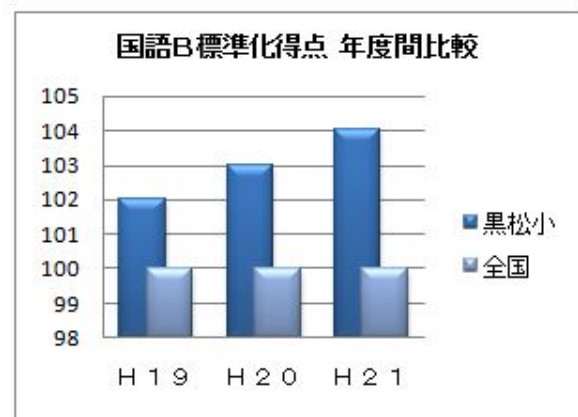


図3

※図3の「標準化得点」とは、全国の平均正答数が100となるように標準化した場合の得点のこと。

■「コミュニケーション」とは

ここで、次年度研究につなげるためにも、「コミュニケーション」について再考しておきたい。日本経済団体連合会による 2008 年度のアンケート調査結果によると、新卒者採用選考時に重視する要素の第 1 位は、6 年連続で「コミュニケーション能力」(76.6 %)となった。以下、第 2 位の「協調性」が 56.1 %, 第 3 位の「主体性」が 55.2 %, 第 4 位の「チャレンジ精神」が 51.5 %, 第 5 位の「誠実性」が 40.0 %と続いている。(日本経団連 Web ページ参照 <http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2009/034.html>)

では、企業が求める「コミュニケーション能力」とは、具体的にはどのようなものなのであろうか。独立行政法人労働政策研究・研修機構による「大学新卒者採用において重視する行動特性(コンピテンシー)に関する調査—企業ヒアリング調査結果報告—」(2009 年 6 月 25 日発行)の中に、「《コミュニケーション能力》はコンピテンシー評価の対象とされることが多いが、その際に問われる能力は『他者の話を正確に理解し、自分の考えを分かりやすく伝えられるか』ではなく、『中長期的に、他者とどのような人間関係を構築するか』である。」という記述がある。具体的には、「自分の意見に固執せず他者の意見も聞き入れて全体としての結論を出そうとしたか」や「周りの人に影響を与え、全体最適へ向けて動かすことができる」、「他者を巻き込み動かす力」などが挙げられている。

これはまさに、本校の自分づくり教育で目指している「かかわる力」(人間関係形成能力)や「うごく力」(意志決定能力)に重なる。

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
かかわる力	○自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 ○友達と仲よく遊び助け合う。 ○あいさつや返事をしっかりする。 ○「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。	○自分のよいところを見つける。 ○友達のよいところを認め励まし合う。 ○自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 ○友達と協力して学習や活動に取り組む。	○自分の長所や欠点に気付く自分らしさを発揮する。 ○話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。 ○異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。
うごく力	○自分の好きなもの、大切なものを持つ。 ○自分のことは自分で行おうとする。	○自分のやりたいこと、よいと思うこと、してはいけないことを判断して行動する。 ○自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする。	○生活や学習上の課題を見つけ、自分の力で解決しようとする。 ○将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする。

仙台市においても、平成 22 年度「杜の都の学校教育」が目指すものとして「社会的自立」を掲げ、自分づくり教育の推進を柱に位置付けている。そこでは、「個性を尊重しつつ能力を伸ばし、個人として社会の一員として生きる基盤を育てる」ことを目標としている。

社会が人と人とのつながりから成ることを理解して人間関係を大切にすることは、社会的自立に欠かせない。なぜなら、他者とのコミュニケーションを通して、初めて自己を再確認することができるからである。したがって、「コミュニケーション」を単なる情報や知識の伝達ととらえたり、単に活発に話し合っていることをよしとしたりするのではなく、児童同士が共感し合い信頼関係を育んでいけるようなコミュニケーション力の育成を心がけていきたいと考える。

■実から種へ 一言語活動の充実に向けてー

12月9日の研究推進委員会で、次年度の校内研究について話し合った。各学年からの報告では、「表現力・コミュニケーション力」に加えて「書く力」「語彙力」「思考力」等が児童に身に付けさせたい課題として出され、それらを包含する形で「確かな学力を育む言語活動の充実」をテーマに研究を進めていくことを確認した。その後実施した職員対象アンケートを集計した結果、取り組んでみたい研究の視点は以下の通りである。

□他者とのコミュニケーションの充実（ペアやグループによる対話や議論，討論など）	-----	11名
□論理的思考力・判断力の育成（筋道を立てて考えを説明するなど）	-----	10名
□感性や情緒を育む（体験活動の重視や人間関係を豊かにするなど）	-----	9名
□教科を横断した指導の充実（すべての教科・領域における言語活動の充実を図る）	-----	9名
□学習環境の整備と活用（掲示物の工夫，学校図書館の活用，校外学習の位置付け等）	-----	5名
□その他	-----	2名
（学び合いを通して広げる・深める指導の工夫，そこでつける確かな学力を明確にする）		

上記の視点を実現するためにも，新学習指導要領の主旨をしっかりと踏まえ，各教科・領域を通じた言語活動の充実に取り組んでいきたい。

新学習指導要領のねらいから，今後全ての教科・領域で，基礎的な知識・技能の習得とこれらを活用する力をバランスよく育てていくことが求められる。断片的な知識は，その場では何となく分かったつもりでも，記憶に定着しない。既習事項を想起・活用させながら知識を有機的に関連づけて，新しい学習内容の理解を促していくことが大切になる。1～3年では具体的な生活場面との関連を図り，4～6年では資料活用能力や応用力を高めるなど，発達段階を踏まえた指導を心がけていきたい。

その際，教師主導から学習者主体の授業へと転換していくことが重要なポイントとなる。教師が一方的に説明して「わかりましたか」と聞き，それに児童が「はい」と答えるようでは，児童の言語活動が成立しているとは言えない。知的好奇心を持ち，問題を解決するために収集した情報を児童が主体的かつクリティカルに思考・判断したり，調べてまとめたことを自分の言葉で相手にわかりやすく表現したりする能力を高めていくことが大切なのであり，言語力育成のねらいはまさにそこにあると言える。

これまでの3年間に，家庭科を除くすべての教科・領域で研究授業が行われ，その実践総数は97となった。この豊富な実践事例の蓄積を生かしつつ，次年度は「言語活動の充実」の具現化に向けて，日々の授業改善と確かな学力の育成により一層努めていきたいと考える。

